

花壇

井上靖

花壇

井上靖

花^か
壇^{だん}

昭和五十一年十月三十日 初版発行
昭和五十二年二月十五日 六版発行

著 者 井上靖

発行者 角川春樹

発行者 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三ノ三 郵便番号一〇二一
振替 東京三一九五二〇八 電話(03)二六五一七一

印刷所 旭印刷株式会社

製本所 株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0093-872174-0946(0)

花 壇

目次

雨
期

星

黒い石

生と死

ひまわり

蟬しぐれ

ゆく雲

七

五

四

六

八

一〇

三

遠い日
晩秋
師走
裸の梢
新春
波濤
冬の旅

二五
二四
二五
二九
二六
二五
二七

裴
頓

加
山
又
造

花 壇

雨 期

江波棟一郎は茶の間で遅い朝食をすませると、応接間を隔てて、その向うにある書斎に入り、縁側の籐椅子に腰をおろした。

縁側の向うには雑草で埋まっている庭が広がっている。こういうと、かなりの広さを持った庭のように受取られるかも知れないが、敷地全体が二百坪で、その中に五十坪ほどの家と、物置と、車庫が建っているのです、どうか庭としての体面を保てるほどの広さである。

それにしても、一応芝生の庭として造つてあるので、手入れさえすれば、曲りなりにも庭として通用するのであるが、今年になってからはほつぽらかしである。去年までは年に何回か、以前から昵懇な植木屋がはいっていたが、今年からそれを断つてしまった。郷里から持つて

来て、庭の隅に植えてあった石楠花しゃくなんがの木を、勝手に引きぬいたことに腹を立てたのである。

「石楠花など、東京では育ちませんよ」

これが植木屋の言い分であつたが、育つか、育たないかは、育ててみないと判らないというのが、棟一郎の考へ方であつた。棟一郎にしても、高山植物の石楠花が、公害の多い東京で育とうとは思つていないが、折角持つて来てくれた人の好意に対しても、一応育てるだけは育てて、引っこぬくのは、その上のことにすべきであらうと思う。

そんなことから植木屋の出入りを断つてしまったのであるが、家の者たちには、庭の掃除は、健康のために自分が受持たせて貰うことにする、そんな宣言をしてしまつてあつた。実際に、その時はそのようにも思つたのであるが、ただ、いっこうにそれができないだけのことがある。

妻のゆきは、日に何回か、庭に眼を当てては、あーあと、大きな溜息をつき、

「今年の夏は、さぞ蚊がたいへんでしよう」と言う。すると、四人兄妹のうち、一人だけ嫁がない

で家に居る末娘の恵子が、

「蚊どころじゃないわよ。わたし、今年のお盆には幽霊が出ると思うの。東京中探しても、こんな凄いい庭ないわよ」

多少棟一郎に聞かせるための言い方であるが、棟一郎はいつも聞かないふりをしている。

お手伝いのおばさんが、見るに見かねて、鍬を持ち出して来たりするが、すぐ諦めて、

「もう手おくれです、こうなつては」

そんなことを言う。

恵子が幽霊が出そうだというその庭の中で、紫陽花あじさいの株が、湿っぽく重い空気を吸いながら、十数個の薄紫の花を咲かせている。その真上に覆いかぶさるように梅の青葉が置かれてあって、木についたまま熟れきった実が、時折音をたてて、地面に落ちていく。

そして庭の三方を取り巻いている塀の際は、雑木の緑で埋められており、よくもこれだけ生い茂ったものだと思うほど、雑木は生い茂っている。

庭の草の方は、その気になって、毎日労力を投入すれば、引抜けないわけでもなさそうだが、雑木の茂みの方

は、素人ではいかんともなし難い。やはり植木屋の領分である。

いずれにしても、このまま放置しておくわけには行かないから、そのうちに何とかしなければならぬが、しかし、棟一郎は心から困惑しているわけではない。すっかり荒れはててしまった廃園には、廃園としてのなにか捨て難いものがあると思う。

棟一郎は、この日も、遅い朝食のあとの時間を、煙草をくわえながら、荒れた庭とむかい合つて過した。

自分の六十年の人生も、さしずめ、この庭のようなものであるかも知れないと思う。人間六十年も生きてしまふと、その長い過去はすっかり荒れた廃園に化してしまふ。何もかもが、雑草の蔭にかくれたり、雑木の茂みに包まれたりしてしまつて、ぼうぼうたる同じような風景だけが、どこまでも伸びているだけである。

六十年の過去には得意の日も、失意の日もあった筈であるが、それさえも雑草に覆われてしまつていふと思う。実際に一番得意の日を拾い出そうと思つたが、拾い出せなかった。失意の日も同じであった。ただひたすら歩きずめに歩き、忙しく駆け廻つて生きて来たと思う。そし

「今初めて立ち停まって、己が生きて来た過去を振り返ってみると、一望の雑草に覆われた道が続いているだけのことである。」

妻のゆきがお茶を持って来た。

「あなた」

一種独特の調子のある言い方である。

「庭か」

先廻りして言うのと、

「庭も庭ですが、それより、会社をおやめになってから、今日で丁度二カ月になりますが、何もしないで、毎日、ここでぼうとしていらっしゃる。子供たちも心配しています」

ゆきは言った。

「会社をお引きになったことについては、誰も何とも言うておりません。何かお考えがあつたことでしょうから、それについては口出しはしません。ただ毎日、昼間はここで、何もしないでぼうとしていらっしゃる」

「ぼうとはしていない。ものを考えている」

「何を考えていらっしゃいます」

「もう一度、恋愛できないものかと考えている」

「老いるくの恋ですか」

「そう」

「どうぞ。——誰も相手にしないでしょ」

「そう見限つたものでもない」

「老いるくの恋なら、老いるくの恋でもかまいませんから、なさつたらいいわ。何もしないで、ぼうつとしていらっしゃるよりは。——子供たち、本心に心配しているんですよ。急に生活が変わつて、体を動かさなくなつたら、体を壊してしまふでしょうって」

「夜は毎日、出歩いている」

「夜は宴会。あの宴会こそ、わたし変だと思ふんです。会社をおやめになつたんだから、宴会もおやめになればいい」

「そういうわけにはゆかん」

「そんな会社のやめ方って、あるかしら」

「会社もやめ、宴会もやめたら、それこそ何もすることがなくなつてしまふ。会社はやめたが、宴会の方はやめん」

「何をおっしゃつてゐるんですか。わたし、まじめに言つてゐるんです」

「俺もまじめに言っている。とにかく、当分、俺のすることには口出ししないで貰いたい。もう暫く、そつとしておいてくれ。人生の休暇だ」

「この前、一カ月だけほっておけとおっしゃったから、そうしました。でも、もう二カ月になります」

「働けというのか」

「そんなことは言いません。食べるお金は戴いているんですから。子供たちが心配しているのは、健康のことなんです。せめて、一時間でも、庭にお出になればいい」

「いま出る」

「いつのことやら。ああ、とうとう、この家も、お化け屋敷になってしまった」

「お化けが出るとしたら、どこから出ると思う。俺はあの櫓やぐらの木の茂みあたりからだろうと思う」

「何をおっしゃってるの」

「昼食はここに運んでくれ」

「おばさんにそう言っておきます」

「昼食を食べたら、二時間昼寝する。誰もこの部屋に入らないように。電話は取り次がないでくれ」

「どうぞ、お好きなように」

ゆきはつんとした背を見せて、部屋から出て行った。

午後、客があった。二、三年顔を合せていない旧制高校時代の同級生で、大学を卒業すると官界に入り、官吏としては次官まで行き、退官後は幾つかの会社の顧問のようなことをしている佐伯という人物である。

「ふいに人生観が変わったという専らの噂だがね。一体、どうしたんだい」

佐伯は言った。

「人生観が変わったわけではないが、六十の声を聞いた時、ふいに金、金、金と、金を追い回している仕事が悪

くなった。実際に、たとえ小さい会社でも持っている、この時代を生き抜いてゆくことはたいへんだからね」

「結構な身分だな、そんなことを言えるのは。——で、これからどうする。何をするつもりだ」

「別に考えていない。一年ほど、休ませて貰って、その間に、余生をいかに送るか考えるつもりでいる。ただ、もう金を追い回す仕事だけはご免蒙りたい。会社はやめても、どうにか生活できる金はあるような仕組になっている」

「そりゃそうだろう。君が造った会社なんだからね」

「別に、そういう権利を主張しているわけではない。その点はきれいに身を引いているよ。ただ多少の株は持っているから、会社が潰れない限りは自動的に入ってくる。僅かだがね。でも、もう息子二人は一本立ちになっているし、二人の娘のうち一人は片付いている。未婚のが一人残っているが、これも来年の春に嫁ぐことに決まっている。そうなる、老妻と二人だけの生活だ。金は要らん」

「それにしても、どうしてそんな気になったんだ」

「僕の家にはちょっと妙な血があつてね」

それから、

「親父は軍医だったが、五十幾つかで引退すると、郷里に引込み、再び患者の脈をみることはなかった。母方の方にも、同じような血が流れている。母のすぐ下の弟だが、田舎でバス会社をやり、社長に収まったまではよかったが、突然、ある日辞表を書いた。特に理由というものはなかった。僕が本人から聞いたんだから間違いはないが、彼自身考えて、引退の理由というものはないらしいんだね。ふいに嫌になったと思つたら、もう辞表を書

いてしまつていたというんだ。ああ嫌だ！ 彼はそう思つたに違いないんだね。君の言う人生観が変わつたというようなものではないんだな」

棟一郎は言つた。叔父のことを言っているのか、自分のことを言っているのか、訪問者には判らなかつた。

「人生観が変わつたんでなくて、血の問題だと言うんだね。——そう言われると困るが、とにかく、僕は惜しいと思うね。どう考えても六十で引退するではないよ。仕事は、これからじゃないか」

「でも、もう引退してしまつた」

「確かに引退した。君は、自分が苦勞して造り上げた自分の会社・江波建設から身を引いた。これは確かだ。人生観の変化か、血の問題か、それは第三者の僕には判らないことだが、いずれにしても、そうなるにはそうなるだけの動機というものはあつたと思うんだ。何かに腹を立てたとか、——」

「腹など立てん」

「腹は立てないにしても、仕事の上で、まあ、何かあつたと思うね」

「何もない」

「何もなくて、どうしてやめた。折角苦労して造った自分の会社をどうしてやめた」

「だから、血の問題だろうと言っている。僕の家系にはそういう血が流れている。ああ、嫌だなと思ったら、むしろ嫌になっちゃおう」

「じゃ、一体、何を嫌だと思ったんだ。問題は君に、ああ嫌だなと思わせたその実体だな」

「それは判らん。突然仕事で嫌になっただけのことだ。実体もくそもない」

そこへ、ゆきがお茶のかわりを運んでくると、

「奥さん、いけませんな、どうも、お宅のご主人は。――

――若い時から頑固で、わからずやのところがありました、それがひどくなっている」

佐伯は言った。多少腹を立てているのか、真顔だった。

「そうなんでございますよ。何を考えていることですか」

「今日は、これからの相談に来たつもりなんです、どうもいけません」

すると、棟一郎は、

「相談か、それはだめだ。君が何しに来たかぐらいは判

っている。どうせ、どこかの会社の顧問になれとか、どこかの会社の面倒をみるとか、そんな話に決まってる。だめ、だめ。よその会社を応援するくらいなら、自分の会社はやめんよ」

それから、

「まあ、久しぶりに会ったんだから、ゆっくり酒でも飲もうよ」

と言うと、

「そんなことはしておれん。僕は現役だからな」

訪問者は言った。やはり多少腹を立てているらしかった。

夕方、会社の若手幹部で、半年ほど北欧に出張していた小森から電話がかかって来た。今夜訪ねていいかどうか、都合を訊いてきた電話だった。自分の出張中に棟一郎が引退したので、事情が判らないらしく、受話機の奥から聞えて来る声は緊張していた。棟一郎も、何かと目をかけて来た若い部下と会いたくもあり、ゆっくり話したくもあったので、相手に二人が会う料亭の名を伝えた。棟一郎は約束の時間に、銀座の小さい構えの料亭に出

向いて行つた。小森は奥の座敷の一つに既に姿を見せていた。

「いつ、帰つて来た」

「きのうです。社長の引退は、もちろん向うで知りましたが、いっこうにわけが判らないので、手紙も差し上げませんでした。一体、どうしたんです、社長」

小森は言つた。

「社長と言ふな。もう、社長ではない」

「それは、そうですが、どうも狐につままれたような話で」

「まあ、そんなことは、どうでもいい。北欧の冬の生活の話でも聞こう。俺が出張を命じたんだから、君の方には報告する義務があるよ。と言って、仕事の話は要らん」

「冗談じゃありません。仕事の話以外、何もありません」

「寒いところだから、毎晩酒を飲んだろう」

「酒を飲みに行ったんではなくて、仕事をしに行ったんです。ご自分といっしょにしては困りますよ。一体、どうして、——」

酒と料理が運ばれてくると、棟一郎は昼間佐伯と交したと同じようなやりとりを、若い部下との間に、もう一度繰り返さなければならなかった。

「社長、そんな子供騙しみたいなことを言つても、通用しませんよ。少くとも、私には、そんな言い方はしないで下さい」

「社長、社長と言ふな」

「納得がゆくように、引退問題を説明して下さいまでは、社長と言いますよ。私にとっては社長なんですからね。それから引退の理由以外に、もう一つ、これから何をなさるか」

「何をしようと、君を引張るようなことはせん」

「事情によつては、そちらをお手伝いしますよ。私もきのうから、急に会社の仕事嫌になつています。そっちに行きます。どうも、そっちの方がよさそうです」

小森は言つた。本当にそんな氣になつてゐる顔である。

「そっちに行きますよ、そっちに。——新しい仕事の方をやらせて貰います。社長が愛想をつかした江波建設などにいませんよ」

小森は言つた。

「自分が苦勞して造った会社だ。愛想づかしなんてしないよ」

「では、どうして引退します」

「いやに大きな口をきくようになったじゃないか。社長でなくなったと思ったら、やたらにのしかぶさるような言い方をする」

棟一郎が言うと、

「嫌になっちゃいますな。自分で引退しておいて、僻んではいけません。私はどんな仕事でも、とにかく社長の下で働きます」

「当分、仕事はせん」

「当分しなくても、やがては何かするでしょう」

「考えておらん」

「いまは考えていなくても、いつかは考えるでしょう」

その時まで待ちます」

「待つて貰つても、むだだ」

それから、

「そりや何かやるだろう。ただ人を使う仕事はせん。絶対にせん」

「じゃ、どんな仕事をなさいます」

「隨筆でも、書くか」

すると、小森は驚いた顔をして、

「冗談じゃありません。二、三年前に隨筆集を一冊出したからつて、隨筆家になれるものではありません」

「ちゃんと注文がある。今も、二つ話がある」

これは本当だった。業界紙から短い隨筆の注文が二つ舞い込んでいた。

「この前、お出しになった隨筆集ですが、あれ、何という題でした」

「水臭い奴だな。もう忘れたのか、"やぶにらみの人生"という本だ。洛陽の紙価を高めた」

「洛陽の紙価を高めたかどうか知りませんが、あれは出版部数の半分は会社で買いました。できるだけ社員に買わせ、残ったのは会社のお中元に使いました。それでもまだ残ったので、お歳暮にも使いました」

「うそを言え」

「うそなんて言いません。これだけは言うまいと思っていましたが、こうなると、やはり本当のことを言っておいた方がよさそうです」

「それなら、それでもいい。内容については、どう思う」